

生活者としての子ども

高橋 さやか

子ども、特に就学前（即ち六歳未満）の子どもの教育を考へる場合に、今さらのように、遊びの重要性を主張しなければならぬような現実には、かなりしばしば遭遇するようにこのごろ感じている。

遊びとは、言うまでもなく、学習やしごとと一応は対立する概念の中に掌握されるものであるが、その本質は、要するに、活動の結果に目的がある（期待される成果をまつ）のではなく、活動の過程あるいは活動それ自体において目的達成が現前し、活動の動機にも、活動過程にも、興味と愉悅が実感されるものであると規定して支障はないと考えられる。学習やしごとは、活動が目的達成の手段であり行程であるが、遊びは、活動と目的達成とに間然するところがない。

このような遊びは、成年者におけるそれはしばらくおくとしても、未成年——とくに、六歳未満の人間においては、学

習の手段というよりも、まさしく、学習の成果——目標達成である、という現実の意味をもつ。

誕生以後、人間の子どもは、絶えず学習している。臍動と呼吸はほとんど学習する余地のない生理作用といえるかもしれないが、摂食をはじめとして、睡眠も排泄も学習要求されるいとなみであり、さらに、身体活動、感覚・知覚活動、情緒の発動——表現とその調整、意識や意志の発動とその調整、コミュニケーションのあり方、……すべて学習せざるを得ないものばかりである。このようにして、子どもの生活は、学習活動によってみたまされている。

子どもにおいては、生活者であることは、不断の学習活動をつづけることによって成立している。学習であるから、その成果は、「能力の獲得」として達成を見ることになる。そして、子どもの遊びは、まぎれもなく獲得された能力の発動

であり、「発達」それ自体の実態以外の何ものでもない。

走れない子どもには、鬼ごっこや駆けっこはできない。ブランズ感覚の訓練がなければブランコもシーソーもすべり台も恐ろしいだけである。コミュニケーションのあり方を学んでいなければ、如何なるごっこ遊びも面白いはずがない。

子どもの生活は、遊びの生活だ、とは、かなり言い古されたことばである。言いはじめられたその時代には、——フレールベルが、母と子の遊びを重視し、恩物を発想し、そして労働作業を重んじたころには、子どもにおける生活即遊び、遊び即生活、という意味が、正確に把握されていたのではなかったか。

ルソー以後の汎愛学派の人びとの時代にはまだ、遊びは、子どもの自然を重んじた学習の手段である、というような発想が見られるようであるが、フレールベルにおいては、遊びは、子どもにおける生活活動の必然的形態、それも最も充実した形態である、という認識が明確である。しかし、案外に、フレールベルの後続者の大半が、再び、子どもにおける遊びの意義を見失ってしまったようである。

今日、意外に多くの教育者——それも教育学を専門とする

学者と名のつくような人びとが、真面目にひらき直って、「幼児に教えて、何故悪いか。教えないで放任することは、無責任かつエネルギーの浪費である」式の論法を展開されるのを見聞すると、つくづく……さあ、何と言おう、安手のタイムマシンにのせられて、一世紀半ばかり逆行する途中でエンストでも起されたような気分になる。教える——？ 教えようが教えまいが子どもは不断に学習せざるを得ない実在者であり、教えるということが、学習の必要を充足させる、という意味ならば、悪いどころか、教育者たるもの不断の配慮を怠ってはならない。それは、一つの生命が存在するや否や、教育のいとなみも存在するでなければならぬ。ただ、教材を生活活動にとり込まない形で、うけとらせようとすることは、生活者としての子どもを疎外する結果を招く。このことばかりは改めてきっぱり言い切っておきたいのである。満六歳に達する前後には、子どもは身辺生活においてはほぼ完全な独立者になる。ただし、そうなるためには、生れた時から生活者としての活動をつづけ経験を積まなければならぬのである。

(西南女学院短期大学)